

伝統を学び、郷土を知る

現在、子どもたちへの教育において、地域について考える「ふるさと学習」が取り組まれています。今回は、地域の伝統行事である舟グローの奉納を通じて、地域活動の原動力として活躍する豊玉高校の皆さんの取り組みをご紹介します。



きっかけは地域の人たちからのSOS

竜宮伝説の残る和多都美神社では、旧暦8月1日に行われる古式大祭で、海から神様を招くための儀式として「舟グロー」を奉納してきました。毎年、地域の人たちが協力して行っていたが、人口減少による担い手不足により、2015年を最後に途絶えてしまいました。

地域の伝統行事をなんとか続けたいと、地域の人たちが白羽の矢を立てたのが、豊玉高校の生徒たちでした。昨年度の和多都美神社古式大祭において、舟グローの漕ぎ手として参加し、6年ぶりに奉納行事が復活しました。

伝統の復活と社会への参加は、生徒が郷土に関心を持つきっかけとなります。豊玉高校では、舟グロー奉納を、生徒を育てる教材として、そして、地域を活性化する方法として活かすことができないか、全校生徒が関わって郷土探求の取り組みをスタートしました。

今年度は、漕ぎ手としての参加だけではなく、奉納で使用する法被のデザインや舟の準備、舟グローに関連した郷土のPRなど、幅広く活動することで問題点や可能性を肌で感じながら郷土の知識や関わりを深め、持続可能で地域の活性化につながる視点の育成などに取り組んでいます。



初めて参加した昨年度の舟グロー奉納
この時は漕ぎ手としてだけの参加でした



陸上での櫓漕ぎの練習



取り組みをホームページなどで発信



地域の魅力向上につながる動画作成



地域の指導をうけ、舟グローの準備や
後片付けまで生徒が中心となって行いました



法被の一番目立つところに鳥居を入れたり、対馬や豊玉の魅力イラストにして法被に取り入れましました！

デザイン・マネジメント班
江口 穂乃花さん (2年)



レース班
阿比留 晴樹さん (2年)

漕ぎ手をまとめるリーダーとして、どうしたらみんなの力を引き出せるのか、漕ぎだすタイミングや息の合わせ方などを考え、指揮にあたりました。



生徒が考えたデザイン案をもとに、島内のデザイナーも協力して法被を作りました



多くの観客を前に力強く櫂を漕ぐ生徒

息を合わせて奉納

9月13日、製作した法被を着用して舟グローの奉納を行いました。



1・2年生26人が舟に乗り込む



完成した法被

出来上がった法被を見た時は、仕上がりに鳥肌が立ちました。当日は、スターターや生徒会長として運営のまとめ役をして、伝統行事を行う大切さや大変さを肌で感じました。

学生だけではできることは限られているけれど、色々な人たちと協力することで形になることもあるのだとわかりました。

櫂を落としそうになったり、周囲と息を合わせるのが大変でした。舟グローは誰もがができる経験ではないので、貴重な経験ができました。

高校は、中学に比べて地域との関わりが少ないと思っていました。しかし、このように地域の人たちとのつながりができ、直接声を聞くことができ良かったです。

しっかり声を出しながら、みんなと息を合わせて漕ぐことができました。競漕には負けてしまったけれど、あきらめずに漕いでゴールできたことは良かったです。

ボランティア活動やこのような行事を通じて、地域の人たちとのつながりができました。小学校での盆踊りに続いて、伝統行事に参加できて良かったです。



デザイン・マネジメント班
阿比留 光希さん (2年)



レース班
波多野 泰史さん (1年)



レース班
阿比留 環さん (2年)

地域のことを知ることを学ぶ小中学校時代とは違い、高校では実際に足を運んで行動し、対馬の発展につなげようという取り組みができていると感じています。この経験を活かして、様々なアプローチで対馬発展のための提案をしていきたいです。

法被のデザインに関わり思い入れが強かったので、法被を着た仲間たちが海にでている姿を見て、胸が熱くなりました。地域の人たちに喜んでいただけたことが嬉しかったです。



デザイン・マネジメント班
江口 穂乃花さん (2年)



レース班
阿比留 晴樹さん (2年)



和都美神社 禰宜
平山 雄一さん

舟グローは、かつては氏子地区の若者たちが奉納していましたが、少子高齢化の影響を受けてしばらくの間、途絶しておりました。

嵯峨地区の氏子さんが豊玉高校に声をかけて頂いたのをきっかけに、卯麦地区の氏子さんのご助勢により昨年より復活することができました。

これもひとえに高校生の皆様の努力の賜物であり、それを支えてくださった先生方、保護者の皆様のご理解あつてのことと厚く御礼申し上げます。

また、本年は大鳥居竣工を記念して生徒の皆様に法被のデザインを手がけて頂きました。MITさんのご協力を得て完成致しましたが、自ら率先して取り組むことで対馬の歴史文化、地域の伝統や神社を知る良いきっかけになったかと思えます。

一人でも多くの生徒さんがこの経験を単なる思い出として脳裏に焼き付けるだけではなく、次の世代につなぐ対馬の人財となってくれることを切に願います。



舟グローを指導した
安田 壽和さん

私たちの先祖は、エンジンのないこの舟で漁をしたり、海峡を横断したりしていました。先人たちがどのように考え舟を操っていたのかを感じてほしいと指導しました。練習では舟の上だけでなく、体育館に櫓を持ち込んで練習し、仲間と櫓を操る、舟を操ることを身体で憶えてもらいました。

高校生には、今の時代では体験することが難しいことに挑戦し、それを乗り越えたことを誇りに思っています。これからも対馬を自慢できるような体験を沢山して、次のステージへ羽ばたいてほしいと願っています。

高校生の行動力を地域の再発見につなげる

対馬の高校生は、小中学校時代に「ふるさと学習」で伝統行事への参加や、地域のことを調べる学習などを積極的に行っています。そこで培った学習の考え方に、高校生の体力や精神力が加わり、これまで学校や地域の人たちにリードされながら学習してきたことから一歩進み、自ら考え行動することができるようになってきていると感じます。

豊玉高校では、その生徒たちの力を、一度途絶えてしまった地域行事を復活するというプロジェクトを通じさらに高めたいと思っています。

今回の取り組みで生徒たちは、地域の人たちや教職員からきっかけを与えられることで動き始め、漕ぎ方だけでなく声のかけ方や人員配置などを自ら考え、より良い形に変化させていきました。

また、舟の出し入れや管理の一部など、表に見えなかった作業も高校生なら取り組むことができます。そうやって行事全体に関わりながら、舟グロー行事が途絶えてしまった理由を考え、どうしたら継続できるかを研究していくことになります。

当然、研究の中では、現在の対馬において継続する必要があるかなどの議論もあるでしょう。そういう意味でも、生徒たちには「自らが育った所をきちんと知り、地域の活性化につなげる」ことを大切にしてもらいたいと思っています。

将来、生徒たちが対馬のことを聞かれた時、体感して得た対馬にしかない魅力を話すことができる。そのことを自らの拠り所として、心の支えにしてもらいたいという思いでいます。



長崎県立豊玉高校
南波 聡校長

生徒たちの活動の成果は、10月31日の豊高祭や総合発表大会で発表されます

現在、学びの中で対馬について考えることが身近になり、多くの子どもたちがふるさと「対馬」に関心を寄せるようになってきました。子どもたちが、地域について学習することは、地域を元気にするヒントを大人たちに与えてくれます。彼らの行動にどのように答えることができるのか、一緒になって考えていきましょう。